

# 適性検査Ⅱ

## 注 意

- 1 問題は **1** と **2** で、六ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は **四十五分** で、終わりは **午前十一時三十分** です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙にはっきりと記入し、**解答用紙だけを提出** して下さい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、**新しい答えを書きなさい**。
- 6 **受検番号** を解答用紙の決められたらんに記入して下さい。

1 次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。（\*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

おとなしい「ぼく」（「えだいち」とよばれている）は仲のいい友達がいなかったが、小学五年生になって、同級生の押野君が野球にさそってくれたのをきっかけに友達が増えていく。夏休みをおじいさんの住む古い家で過ごしている「ぼく」が縁側の雑巾がけをしていると、押野君が遊びに来た。

雑巾がけをしていると、押野が木戸からやってきた。

「何してんの？ おもしろそー」

ぼくの真剣な汗だくの姿を見ても、押野にはとにかくなんでもおもしろそうに見えるらしい。さっそくいっしょに雑巾がけとなった。

「競争なっ」

と、押野は一人で勝手に決めて、ぼくの返事もきかずに「よい、スタート」と言い、雑巾ダッシュをかけた。あつという間に片道終わって、ぼくに向かって「イエイ」と言った。

押野は、雑巾の幅全部を使って、少しでも早くと面積を稼いでいる。手のひらを置いた位置にしか力が入っていないから、押

野が雑巾がけしたあとは、真ん中と両側がきちんと拭けていない。

「雑巾は、手のひらサイズにコンパクトに小さくちやいけなんだ。そうしないとムラになっちゃうから」

ぼくがそう言うと、押野は自分のやったあとを見て、

「ほんとだ。すっげ、汚い」

と言い、「えだいちの言うとおりだなー」と大きな声で言った。

押野は競争はやめて、ぼくの言ったとおりに雑巾を折りたたみ、一か所一か所に力を入れて拭きだした。木目に沿ってぎゅぎゅぎゅつと。

片道が、今度はさっきの三倍くらいの時間がかかった。額からの汗の粒がながって、いくつもの筋になって頬に流れた。

「すげー、腕いてえ」

「うん。筋肉つくよね」

そう言って、ぼくは半袖のTシャツを肩までまくり、力こぶを作ってみせた。ぼくの細くて白っぽい腕がほんの少しだけ盛り上がった。へえ、と言って、押野はおもしろそうにぼくを見る。ぼくははずかしくなって袖を下ろした。

「えだいち、雑巾がけでヒットを狙うわけだな」

押野にそう言われて、余計なことを言わなければよかったと反省した。それから、押野は力をこめて丁寧ていねいに廊下ろうかを拭いてくれた。要領が良く、押野のやったあととは、ぼくのよりもずっときれいだった。終わったころには、二人とも汗びっしょりになった。

「これ、毎日やったら、すごいよな」

「うん。夏休みは毎日やるんだ、ぼく」

すっげ、と押野は言い、「俺おれもたまにはいっしょにやらせて」と言った。もちろん、とぼくは声に出さずに心の中で言った。

冷蔵庫れいぞうこから麦茶を出して、コップに氷を入れて注いだ。まだ陽ひのあたっている広縁\*ひろえんから少し下がった、確実に温度が低いであろう和室で、足を放り出した。麦茶はすごく冷えていておいしかった。おじいさんが毎日、夜に沸わかして作ってくれた麦茶だ。ぼくは、水出しの麦茶しか知らなかったけど、このうちのほうがなんとなく香りかおがいいような気がする。

「えだいち、もう一杯いっぱい」

押野が水滴すいてきだらけのコップをぼくに差し出す。氷がコップにあたって、カランカランと涼すずしい音をたてる。

見ると、押野は庭に出ていて、太陽に手をかざしていた。

「はい、麦茶」

「おつ、サンキュ」

押野はひよいっとこちらに腕を伸ばしコップを取って、冷たい水滴がしたたっているコップの底をおでこにぴたっとあてた。

「気持ちいい」

真っ黒に焼けている押野の顔。腕や足の細かい産毛うぶげがきらきらと金色に光って見える。

セミの声が空いっぱいにきこえる。のどを鳴らして麦茶を飲む押野は、清涼飲料水せいりょういんりょうすいのコマーシャルの一場面みたいだ。

水滴のついたコップ。

陽に焼けた肌はだ。

太陽に透すける金色の産毛。

セミの声。

夏の空。

ああ、夏なんだなって、ぼくは、これまでで、きっと、はじめて、感じた。こういうのを夏っていうんだなって、五年生の夏になってはじめて実感したのだった。

(やづきみちこ 椰月美智子「しずかな日々」による)

〔注〕 縁側えんがわ——部屋の外側に取り付けた、細長い板じき。

木戸——庭などの出入り口につける、木でできた簡単かんたん

な開き戸。

広縁ひろえん——幅の広い縁側。

【問題1】

ああ、夏なんだなって、ぼくは、これまでで、  
きつと、はじめて、感じた。という部分から、「ぼ  
く」のどのような気持ちを読み取れますか。八十字  
以上百字以内で改行せずに書きなさい。

〈注意〉書き出しの空らんはいりません。

なお、や。はそれぞれ一字として数えま  
す。

【問題2】

この文章を読んで、あなたがだれかといっしよに  
何かをして充実じゅうじつした気持ちになった経験について、  
どのようなできごとだったか、どのように感じ、何を  
考えたかを百八十字以上二百字以内で書きなさい。

〈注意〉書き出しの空らんや、や。や「などもそれ  
ぞれ一字として数えます。

(二)のページには問題は印刷されていません。

## 2

次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。（\*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

世代や地方にもよりますが、中国では、「ご飯を食べたか」と言うことが挨拶のように言われることがあります。もちろん、日本ではそんな挨拶はふつうしません。ご飯を食べたかどうかを聞くことは、相手のことを気遣うことになるのです。

\*タイでも同じようなことがあるそうです。確かに、食事をしたかどうかということは人間にとつてとても大切なことですから、そのことを話題にするというのもわかる気がします。挨拶言葉の発想は、言語によって違ってはいますが、出会いの挨拶の基本は、相手のことを気遣って、声をかけるということにあります。

考えてみると、日本語でも、よく出会ったときに、「暑いですね」「いいお天気ですね」のような挨拶的な声かけをするところがあります。この挨拶は、決して、「暑いかどうか」「いいお天気かどうか」を本当に聞きたくて確認しているわけではありません（例えば、「ね」を極端に高く言うイントネーションで確認するような言い方をすると変でしょう）。

これは、挨拶では、「声をかけ合うことで親しくなったり親しさを維持したりする」という点に重点があるということになります。つまり、お天気のことなどが共通の話題になりやすいということにすぎません。従って、「やあ」のような声かけだけでも、十分挨拶になるし、相手の名前を呼んだり「ご飯を食べたか」と聞いたりすることも挨拶になるのです。

## 〔中略〕

挨拶言葉は人間関係を反映して、様々な使い方の特性をもっています。特に、声をかけ合う、お互いに話を交わす、ということ自体が、コミュニケーションにとつて大切なことだと言えます。そうすることによって、お互いの関係が確認できるので。「大きな声で挨拶しましょう」とよく先生から言われた覚えがありますが、大きな声で挨拶して相手にきちんと声が届かないと、そもそも声をかけ合う、ということが成立しないからです。もちろん、相手をきちんと見て、視線を合わせるほうがしっかりした挨拶となりますし、できればにこやかに明るい声で挨拶を交わすことが望ましいわけです。

（森山卓郎「コミュニケーションの日本語」による）

〔注〕 タイ——東南アジアにある国。

インターネットション——声の調子の上がり下がり。

維持いじ——保ち続けること。

コミュニケーション——言葉や文字、身ぶりなどのいろ

いろな方法を使って、気持ちや

考えを伝えあうこと。

【問題】

この文章をふまえて、あいさつにはどのような役割やくわりがあるのかまとめなさい。それに対するあなたの意見を、自分の体験を交えて書きなさい。全体で、二百六十字以上三百字以内で書きなさい。

〈注意〉書き出しや段落だんらくを変えたときの空らんや、や

。や「などもそれぞれ一字として数えます。

2  
三  
驚  
適  
生  
I



